

春日亦ベテ イーター タイム

「春恋心シエアハウス」番外編

南野十好

Minamino Tohko

御景椿

Illust: Tsubaki Mikage

©心交社

この作品は（株）心交社に帰属します。
無断複写・複製・転載を禁じます。

尚紀なおきが嵯峨さがから思いがけない誘いを受けたのは、卒業が間近に迫った春の日のことだった。祖母のもとを訪ねるといふ嵯峨から、一緒に行かないかと言われたのだ。

嵯峨のおばあさまといふことは、名門嵯峨家の大奥様だ。そんな方といきなり会えと言われても正直困るし、そもそもせっかくの孫の訪問に邪魔な部外者が同道しては、おばあさまも決して喜ばないだろう。そう思つて一度は断つてみたものの、嵯峨からは是非にと乞こわれては、頑こなに拒否することもできなかつた。当のおばあさまが会いたいと望んでいるのだと聞かされては、なおさらだ。

どうやら、嵯峨は自身の性癖を、身内には話していかないらしい。尚紀のことは、同じシェアハウスに住む友人として紹介してくれているのだろう。そう思つたら、少しだけ肩の力が抜けた。そして、嵯峨の誘いを受ける気になれたのだつた。

手土産に菓子を焼いていくといふ嵯峨さがに倣ならつて、尚紀も手まり寿司を持参することにした。美味しいものを食べ慣れているであろう方の口に合うかは

わからないけれど、色鮮やかに握った小ぶりな手まり寿司なら、食べなくても目だけでも楽しんでもらえると思ったからだ。

緊張しつつ、嵯峨に連れられて訪ねた先は、住宅街の街並みに溶け込んだ、思っていたよりもずっとふつうの一戸建て住宅だった。ちよつと意外で、少しほっとした。名家だと意識するあまり、無意識に豪邸を想像してしまっていたらしい。

嵯峨が名家の出だなんていつもはまったく意識していないのに、こんなときばかり家名に圧倒されるなんてどうかしている。いつもは友人の実家を訪ねても、必要以上にかしまったりしないくせに。

小さな自分を少し恥じながら、嵯峨に続いて玄関をくぐる。と、出迎えてくれたのは、お手伝いさんらしき中年の女性だった。緩みかけていた緊張が一気にぶり返す。いくら外観はふつうでも、中はやはり別世界ということなのだろう。

ぎくしゃくと覚束ない足取りで、案内に従って板張りの廊下を進む。前を歩く嵯峨が心配げに振り返ってくれるせいで、かえって緊張が煽られた。な

んとか逃げ出さずにすんだのは、思ったよりも廊下が短かったからだ。

「おばあさま、たかお崇生です」

辿り着いた部屋の扉をノックしながら、嗟峨がよく通る声でそう告げる。すかさず中から返ってきたのは、穏やかな、そのくせどこか愛らしさの漂う声だ。

「いらっしやい。待っていたのよ」

引き開けられた扉の向こうにいたのは、春らしいピンク色のシヨールを羽織った、小柄な白髪の女性だった。わざわざソファから立ち上がって、こちらに手を差し伸べてくれている。

「崇生さんたら、お誘いしてもなかなか来てくれないんだもの。本当に待ちかねたわ」

「すみません」

祖母のもとへと足早に寄った嗟峨が、着席を助けるように手を取りながら、その大きな身体をかすかに縮める。すかさず、ころころと愛らしい笑い声が響いた。

「それだけお勉強が忙しいのだものね。こうして来てくれたのだから、許してあげるわ」

嵯峨を見上げて微笑む様は、聞き知っている彼女の年齢よりもはるかに若く、かわいらしく見える。尚紀の記憶にある故郷の島のおばちゃんやおばあちゃんは、みんないかにも年配という顔つきで、態度も笑顔ももつと豪快だった。

上流階級というのは、庶民とは時間の流れが違うのかもしれない。ほんやりとそんな馬鹿なことを考えながら立ちつくしていたら、ふいに彼女がこちらを向いた。視線が合ったとたん、緊張の針が跳ね上がる。

「あなたが、廣瀬さんね？」

「は、はい」

慌てて返した声が、無様に裏返った。視界の隅で、嵯峨がなにか言いたげに口を開きかける。今の自分は、さぞや滑稽な姿を晒しているのだろう。そうとわかってはいても、なんともならないのが情けない。

嵯峨が声を発するよりも先に、おばあさまの軽やかな声が響いた。

「よく来てくださったわ。崇生さんからお話を聞いて、お会いしたいと思っ
ていたのよ」

いったいどんな話をされているのかと思うと冷や汗がでそうだ。深く考え
ると余計に緊張してしまいそうで、尚紀は急いで手土産の手まり寿司を差し
出した。

「今日は、お招き、ありがとうございます……っ」

おばあさまは箱の蓋を開けるなり、小さく歓声を上げた。

「まあ、これ、廣瀬さんがお作りになったの？　なんてきれいなんでしょう。
早速いただいてもよろしくて？」

きらきらと輝く瞳を向けられて、なんとも落ち着かない気持ちになった。
喜んでくれたようで嬉しい反面、彼女の口に合うかどうか今さらながらに不
安になる。試食してくれた嵯峨が美味しいと言ってくれたのが、世辞ではない
と思いたいけれど。

すかさずお手伝いさんと呼んで緑茶を所望したおばあさまは、茶が届くの
を待つことなくひとつ摘まんで口に入れた。ほどなく満足げな笑みはその顔

に浮ぶ。

「おいしいわ」

でしよう、と得意げに相槌を打った嵯峨に向かって、おばあさまが小さく唇を尖らせる。

「崇生さんは、毎日こんなお料理を食べているのね。ずるいじゃないの」

「毎日なんて、俺も食べられませんよ」

「でも一緒に住んでいるのでしょう？」

「だからって、廣瀬が賄い担当ってわけじゃないですから」

「じゃあ、崇生さんが作って差し上げているの？」

「いや。俺の専門は菓子ですから。それに、一緒に食事ができることだって、そんなに頻繁にはないんです」

「あら、残念ねえ」

「廣瀬も、俺も、これでも結構忙しいんですよ」

いつになく穏やかな嵯峨の表情から、彼がどれだけ彼女を大切に思っているのが窺い知れる。そんな情に厚いところも、彼の魅力のひとつなのだ。

思わず見惚れかけて、尚紀は慌てて表情を引き締めた。嵯峨との仲を恥じているわけではないけれど、だからといって自慢できるものでもない。世間的にも受け入れられるのが難しい関係なのだから、ましてや大切な身内の前で迂闊な態度をとるわけにはいかない。

妙に喉の渴きを覚えて、運ばれてきたお茶は一気に飲み干してしまった。二杯目もありがたくいただきながら、卒業後の身の振り方を報告し始めた嵯峨の声に耳を傾ける。

嵯峨は、以前バイトをしていたというパティスリーに世話になることにしたらしい。そこでもう数年修行を続けて、その後は独り立ちをするつもりだそうだ。

将来の明確なヴィジョンがある嵯峨はやはりすごいと思う。実家に頼ることなく自活してここまでできた彼のことだ。この先も揺らぐことなく突き進んで、きつと数年後には夢を叶えていることだろう。

——僕も、がんばらなくちゃ……。

二杯目もぐっと飲み干しながら、心の中で己に活を入れる。学校の先生の

伝手で、尚紀もこの春から老舗の料亭に世話になることが決まっている。ゆくゆくは島に戻るつもりで上京してきた身だったし、その料亭で花板を目指すなんて大層な野望を抱いているわけではないけれど、せっかく恵まれた環境なのだから、できるかぎりがんばって腕を磨きたい。

島の人々においしい料理を食べてもらいたいというのは今でも夢のひとつではあるけれど、今の尚紀には、島の人々と同じくらい、いや、それ以上に、嵯峨の存在が大切だし、できればこの先もずっと嵯峨の近くで、ともに夢を追いかけ続けたいとも思っているのだ。

ひとしきり嵯峨の話に耳を傾けたおばあさまは、尚紀の今後にも興味を抱いたらしく、屈託のない問いかけをあれこれと投げかけてきてくれた。最初は失礼のないようにと思うあまりに言葉を選ぶのにも苦労した尚紀だったが、かわいらしさすら感じる彼女の様子に次第に緊張もほぐれてきて、小一時間ほど経つ頃には、自分でも意外なほどリラックスして受け答えできるようになっていた。

三時を告げる壁掛けの時計の軽やかなメロディに尚紀が驚くと、おばあさ

まがとても楽しそうに笑い声を立てる。その様子を眺める嵯峨の瞳は、とてもやさしいものだ。こんな穏やかな空間にお邪魔させてもらっているなんて、なんだか不思議で、でも、とても嬉しい。いつもとちよつと違う嵯峨の姿を垣間見られて、好きだという想いがまたひと回り大きくなる。

お手伝いさんが新たに紅茶を入れてきてくれたのをきっかけに、嵯峨の手土産のフィナンシェをいただくことになった。手作りの菓子について、おばあさまが楽しそうに嵯峨に質問を重ねている隙に、尚紀は手洗いに中座させてもらうことにした。

お手伝いさんについて部屋を出て、用を済ませて独りで戻る途中のことだった。廊下の角を曲がろうとしたとき、玄関のほうから早足でやって来た人とぶつかりそうになってしまったのだ。

「うわっ。失礼っ」

咄嗟に身を仰け反らせたら、嵯峨とよく似たよく通る声が降ってきた。慌ててこちらにも詫びようとしたものの、先方が重ねて言葉を発するほうが早かった。

「……きみ、誰？」

「あ、ええと、僕は……」

「ああ、もしかして、崇生のお友達？」

「え？」

「一緒に暮らしている友達って、きみのことなんじゃないの？」

いきなり言い当てられて、思わずまじまじと相手を見つめてしまった。どこか嗟峨と似た面立ちのその男は、尚紀の瞳をまっすぐに見詰め返すと、にんまりとその表情を緩めた。

「はじめまして。崇生の兄の幸生ゆきおです」

「え、あ、あの。廣瀬です。……嗟峨くんには、お世話になってます」

慌てて言葉を返しながら、勢いよくぺこりと頭を下げる。くつくつと、くぐもった笑い声が聞こえた。

まさか、おばあさま以外の身内とも顔を合わせることになるとは思わなかった。まったく想定していなかっただけに、咄嗟にどう対応していいのか思いつかない。嗟峨もおばあさまも上流階級を鼻にかけない気さくな方だけ

れど、この兄もそうだとはいかぎらないのだ。

下手に慣れない会話を重ねて失礼なことになるよりは、やはりここは挨拶だけしてさっさと部屋に戻るべきなのだろう。尚紀がそう思い定めた矢先、あろうことか、兄のほうからぐつと足を踏み出してきた。

「で？ 崇生はうまくやっているのかな？」

「え？ うまくって……？」

「結構、私の強い子でしょう？ 集団生活なんて、うまくやれているのかなと思って」

そう言うなりがしつと肩に手を回されて、顔を覗き込まれる。探るような視線を向けられて、思わず背中に汗が流れた。

もしかして、嵯峨との仲がばれてしまったのではないだろうか。

そんなことはないはずだと思いつつも、緊張と不安で鼓動が速くなる。必要以上に言葉の裏を読んでしまうのは、やはり後ろめたさのせいだろうか。

返す言葉を探しあぐねて、ついつい視線が宙をさまよう。

ねえ、とさらに顔を覗き込まれかけたときだった。唐突に肩から腕が離れ

たと思うと、身体がぐつと後ろに引かれたのだ。

悲鳴を上げる余裕もないまま、身体が倒れる。そのまま床に転がることを覚悟したとたん、背中にとんとやさしい衝撃があった。仰ぎ見た先にあったのは、いつになく剣呑な嵯峨の表情だ。

嵯峨が抱きとめてくれたのだと尚紀が理解すると同時に、低く唸るような嵯峨の声があった。

「ちよつとつ。兄さん、なんでこんなところにいるんだよ」

「なんでって。今日は崇生が珍しく友達を連れて訪ねてくるってばあさまから聞いたからさ、わざわざ研究を切り上げて、来てやったんじゃないか。おまえこそ、ばあさまの相手はどうしたよ」

「廣瀬を探しにきたんだよ。帰りが遅いっておばあさまが心配してるから」

「ばあさまが、ね」

「……なんだよ」

「べつに」

ふっと鼻先で笑う兄を、嵯峨が無言で睨みつける。いつもの嵯峨らしくな

くて、なんだかかわいらしい。

嗟峨の抗議の視線を軽く受け流した兄は、悠然と廊下を進みだしながら、肩越しにひらひらと手を振った。

「ほら、行くよ。ばあさまが心配しているんだらう？」

嗟峨は、喉の奥で小さくひとつ唸ってから、尚紀のほうへと視線を向けた。顔に浮んだ苦笑から、兄をも大切に思っている気持ちが透けて見える。

「……すまん。大丈夫だったか？」

「うん。なんだか面白いお兄さんだね」

嗟峨の苦笑が深くなる。こんな嗟峨の表情も、壺番館ではなかなかお目にかかれないものだ。今日こうして誘ってもらえてよかったと、心の底から思った。

いろんな嗟峨の姿を見られて、嗟峨がどれだけ身内に愛されているのかがよくわかって。そんな魅力的な嗟峨のことが、ますます好きになったし、嗟峨から想いをかけてもらえるにふさわしい人間になれるように、自分ももつともつとがんばろうと思える。

指先でそっと嗟峨の手に触れたら、嗟峨は無言で強く握り返してくれた。言葉以上に想いが伝わってくるようで、幸せだという思いが溢れてくる。上京するためには島を出たときにはこんな未来は想像してもいなかったのに、今となつては、嗟峨がいない人生なんて、考えることすらとてもできない。

廊下の先から、早く、と声が飛んできた。

尚紀は嗟峨と微笑み合つて、声のするほうへと二人並んで足を踏み出した。